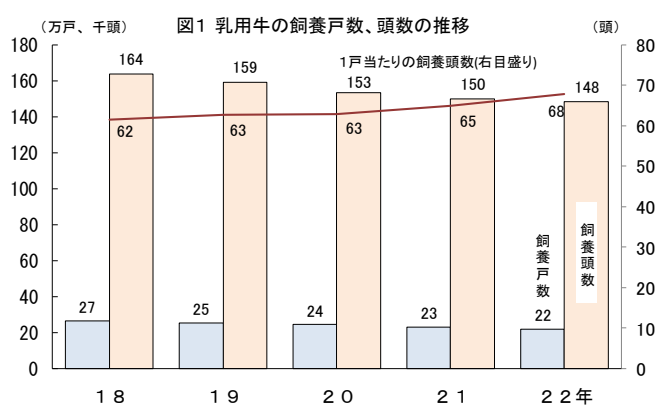


牛乳・乳製品



◆飼養動向

22年2月の乳用牛飼養頭数は148万頭(▲1.1%)



資料：農林水産省「畜産統計」

注：各年2月1日現在。なお、平成22年は概数値

乳用牛の飼養頭数は、平成5年以降、減少傾向で推移しており、22年には1,484千頭(▲1.1%)と前年をわずかに下回った。

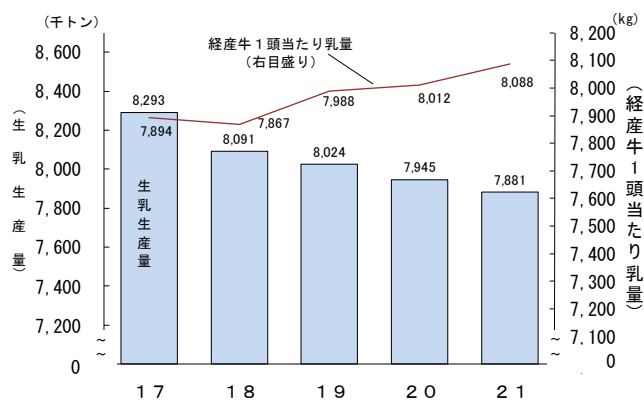
飼養戸数は、飼養者の高齢化による廃業に加え21年の配合飼料価格の高騰による収益性の低下の影響を受け、22年には前年を1,200戸下回る21,900戸(▲5.2%)となった。

1戸当たりの飼養頭数は、小規模飼養者層の減少および大規模飼養者層の増加により規模拡大が進んだ結果増加傾向にあり、22年は前年をわずかに上回る67.8頭(4.5%)となった(図1)。

◆生乳生産量

21年度の生乳生産量は788万1千トン(▲0.8%)と前年度を下回る

図2 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量(全国)

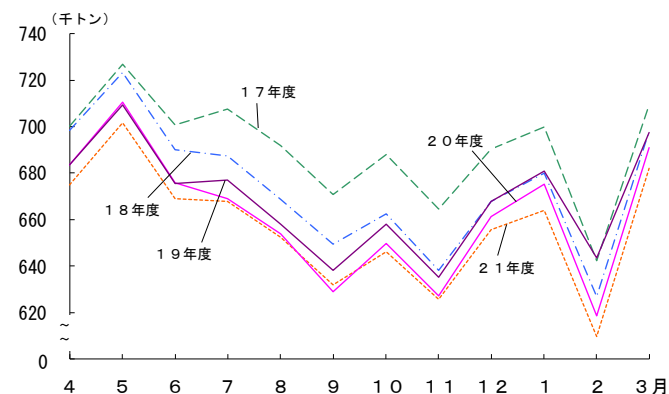


資料：農林水産省「畜産統計」、「家畜の飼養動向」及び「牛乳乳製品統計」

注1：平成21年度の生乳生産量、経産牛1頭当たり乳量は概数値。

2：経産牛の飼養頭数は各年2月1日現在。

図3 生乳生産量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

注：平成21年度は概数値

生乳生産量は、平成元年度の806万トン以来800万トン台を維持し、ピーク時の8年度は約870万トンを記録したが、それ以降都府県での減少により、減少傾向で推移してきた。

19年度は、前年度に引き続き減産計画が実施された中チーズやクリームなど乳製品向け需要が増加したものの、都府県を中心に飼料価格の高騰などの影響を強く受け、生乳生産量は前年同月を下回って推移した。結果、全国では802万4千トン(▲0.8%)となった。20年度は、前年度後半からの飼料価格の高騰などにより、主に都府県の酪農家数

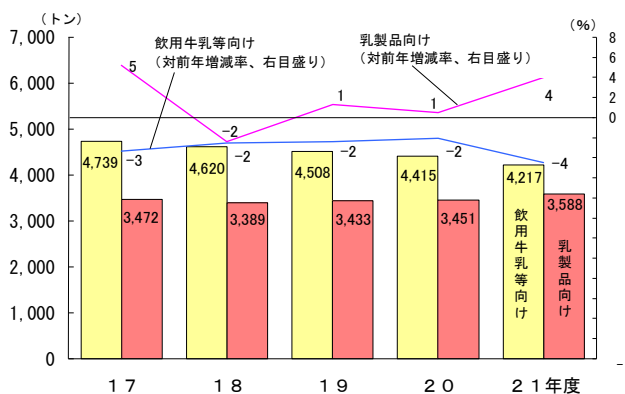
が急激に減少したことが影響し、前年度を1.0ポイント下回る794万4千トン(▲0.1%)と20年ぶりに800万トンを下回った。21年度は前年度に引き続き都府県で減産が続く中で、飲用牛乳の消費低迷も加わり、前年度を0.8ポイント下回る7,88万1千トンと2年連続で800万トンを下回った。

全国の経産牛1頭当たり乳量を見ると、19～21年度は3年連続で前年度を上回り、21年度は8,088キログラムとなっており、全国的に規模の増大に伴って1頭当たり乳量も増加する傾向がみられる(図2)。

牛乳等向け処理量

21年度の飲用牛乳等向け処理量は、7年連続減少し421万7千トン(▲4.5%)

図4 用途別処理量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

注：平成22年度は概数値。

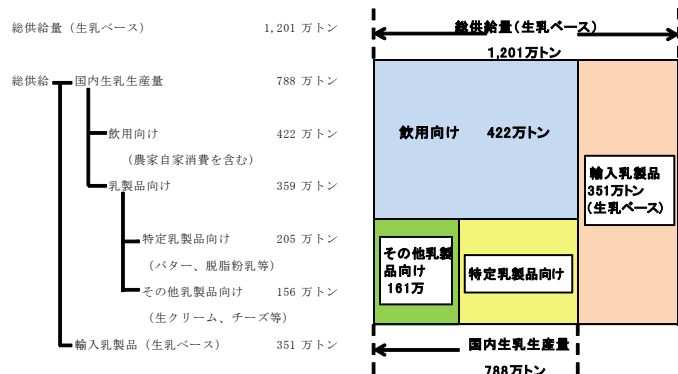
飲用牛乳等向け処理量は、その消費動向を反映して推移しているが、その他飲料との競合などから消費が伸びず、6年度をピークにおおむね減少傾向で推移している。19年度は低脂肪牛乳などの成分調整牛乳の需要が拡大し、乳飲料の生産量が前年度を上回ったものの、引き続きその他飲料との競合により消費は伸び悩み、450万8千トン(▲2.4%)と前年度をわずかに下回った。20年度においても、引き続き減少し、441万2千トン(▲2.1%)とわずかに下回った。21年度は天候不順から減少傾向に拍車がかかり、牛乳生産

量が過去5年間と比べると2割減と大幅な減少となったことから、飲用牛乳等向け処理量は421万7千トン(▲4.5%)とやや下回り、7年連続の減少となった(図4)。

乳製品向け処理量

21年度の乳製品向け処理量は、3年連続増加の358万8千トン（4.0%）

図5 生乳の需給構造の概要（平成21年度）



資料：農林水産省生産局「生産者補給金単価等算定説明資料」

注：四捨五入の関係で、必ずしも計が一致しないことがある。

乳製品向け処理量は、牛乳等向け処理量が減少する中前年を上回って推移し、19年度は、クリーム、チーズ向けな

どその他乳製品向けが増加した結果、343万3千トン(1.3%)となった。20年度も前年度に引き続きクリームやチーズなど向けが増加したことから345万1千トン(0.5%)とわずかに上回った。21年度は10月にチーズ向け乳価が引き下げられ、輸入品との競争力が増したことから下、358万8千トン(4.0%)と前年度をやや上回った。

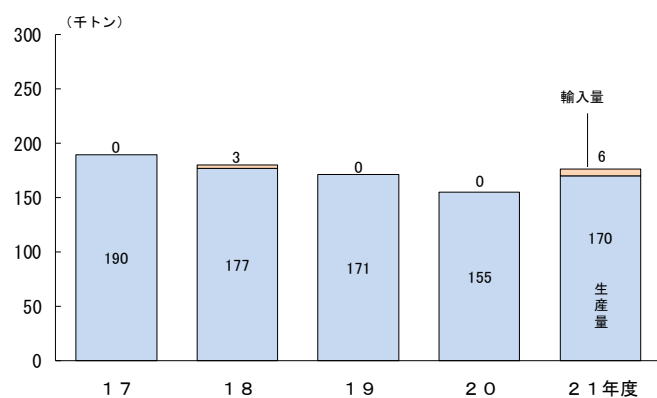
21年度の総供給量は、国内生乳生産が788万トン、輸入乳製品(生乳ベース)が351万トンとなった。国内生産量のうち、飲用向けに54%、乳製品向けに46%が供給された(図5)。

◆乳製品

脱脂粉乳

21年度の期末在庫は前年度を大幅に上回り、大口需要者価格は前年度をわずかに下回る

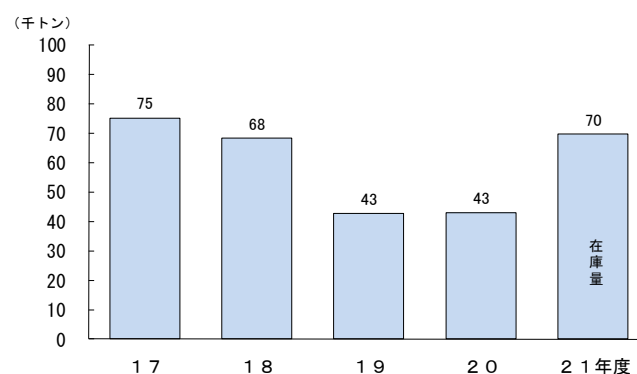
図6 脱脂粉乳の生産量・輸入量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

注：輸入量は機構輸入分のみ。なお、平成21年度は概数値

図7 脱脂粉乳の推定期末在庫量



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ。

19年1月以降は、農林水産省「牛乳乳製品統計」

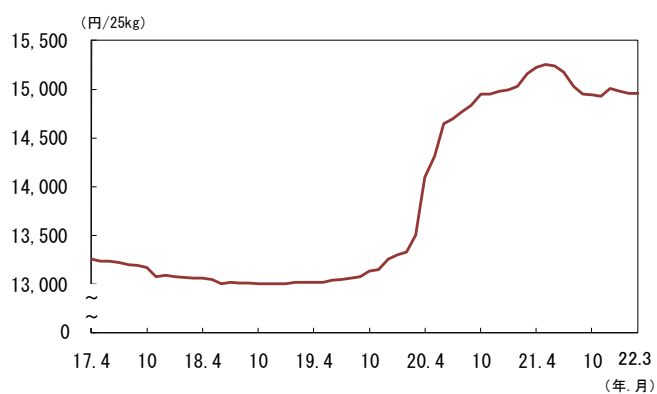
脱脂粉乳の生産量は、14年度以降、需給が緩和し、過剰在庫の解消が課題とされていたことを背景に減少傾向で推移している。これに生乳生産量の減少などの要因が加わり、18年度は以降3年連続で前年度を下回った。しかし、21年度は牛乳等向け処理量の減少が続く中、長期保存が可能な脱脂粉乳に加工され増加傾向で推移し、17万トン(9.6%)と前年度をかなりの程度上回った(図6)。

また、推定期末在庫量は、新規用途の開発、輸入調製品や飼料用との置き換えなど在庫削減対策が講じられた結果、

19年度は4万3千トンと8年ぶりの4万トン台となった。20年度は4万3千トン(0.7%)国際価格の急落に伴う輸入品需要の増加により、前年度をわずかに上回った。21年度は需給の緩和から高水準で推移し、7万トン(61.7%)と大幅な増加となった(図7)。

21年度の推定出回り量を見ると、低調な需要を反映し15万トン(▲3.6%)とわずかに下回り、ここ10年間で最も少ない水準となった。また、カレントアクセス分の輸入量は6,138トンであった。

図8 脱脂粉乳の大口需要者価格



資料：農林水産省生産局調べ。

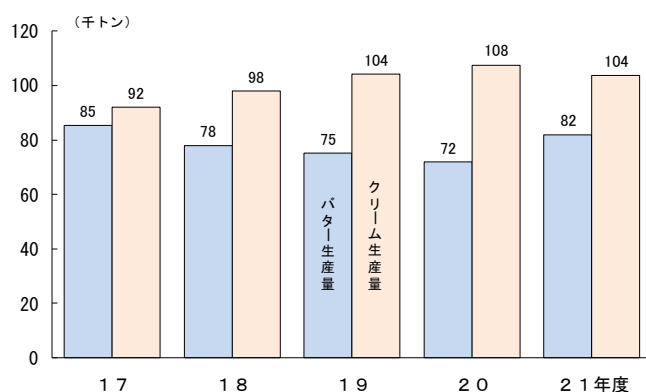
注：消費税を含む。

脱脂粉乳の大口需要者価格は、19年度については生産量の減少に加え、海外の乳製品価格の上昇の影響を受け、国産に対する需要が高まって在庫水準が低下したため価格が上昇、6年ぶりに前年度を上回る13,162円/25kg(1.1%)となり、20年度は乳製品の国際需給が逼迫し、国際価格が高騰し、国産の需要が高まったことから14,785円/25kg(12.3%)と前年度を上回って推移した。21年度は在庫量の増加から下期に入って前年割れとなっており、10月には2年5カ月ぶりに前年同月を下回ったものの、年度平均では15,054円/25kg(1.8%)と前年度をわずかに上回った(図8)。

バター

21年度の推定期末在庫量は前年度を大幅に上回り大口需要者価格は前年度をわずかに下回る

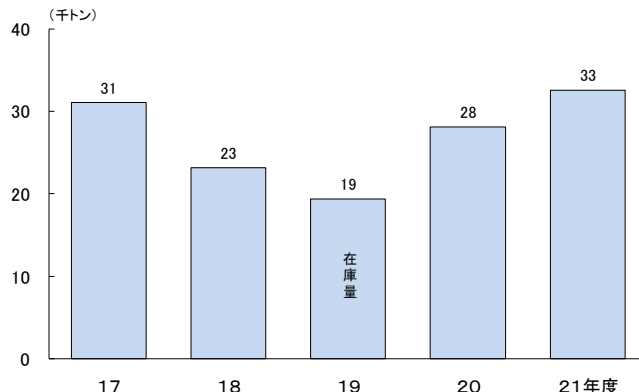
図9 バター、クリーム生産量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

注：輸入量は機構輸入分のみ。なお、21年度は概数値。

図10 バターの推定期末在庫量



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

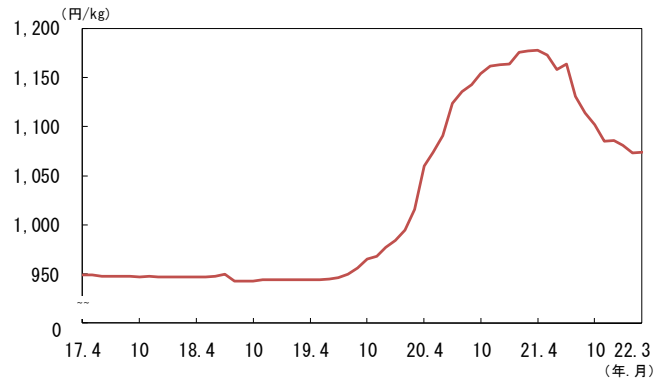
20年1月以降は、農林水産省「牛乳乳製品統計」

バター生産量は、19年度は引き続き生乳生産量が減少し、7万5千トン(▲3.8%)、20年度は生乳生産量が減少する中、クリーム向けが好調だったことを背景に減少し、7万2千トン(▲4.3%)となった。21年度は、乳価値上げに伴う小売価格の上昇から牛乳消費が減少し、バターに仕向けられる生乳が増加したことなどを受け、8万2千トン(14.0%)と前年度からかなり大きく増加した。

クリーム等の生産量は、18年度以降、業務用向けの需要が好調なことを受け、前年度をかなりの程度上回る水準で推移しており、19年度が10万4千トン(6.4%)、20年度は10万8千(3.2%)となったが、21年度は景気低迷と低脂肪製品への移行による生クリーム需要の減少などにより10万4千トン(▲3.6%)と減少に転じた(図9)。

バターの推定期末在庫量は、飲用牛乳等の需要動向に左右されながら、増減を繰り返して推移しているが、19年度は、前年度を4千トン下回る1万9千トンとなった。これは、生産量の減少に加え、中国やロシアでの需要増加や、豪州の大干ばつによる供給減少によって乳製品の国際市況が高騰し、国産品の需要が増加したことなどにより、家庭用バターについては、店頭の商品が薄くなり大きく報道されたため、購入量が増えたことも、在庫量減少に拍車をかけたものとみられる。20年度は、景気の悪化により、マーガリンなどへの切り替えが進み需要が落ち込んでいることなどから前年度を9千トン上回る2万8千トンと増加した。21年度は生産量の増加により引き続き高い水準で推移し、前年度を4.5千トン上回る32,600トン(16.0%)となった(図10)。カレントアクセス分の輸入量の実績はなかった。

図11 バターの大口需要者価格



資料：農林水産省生産局牛乳乳製品調べ。

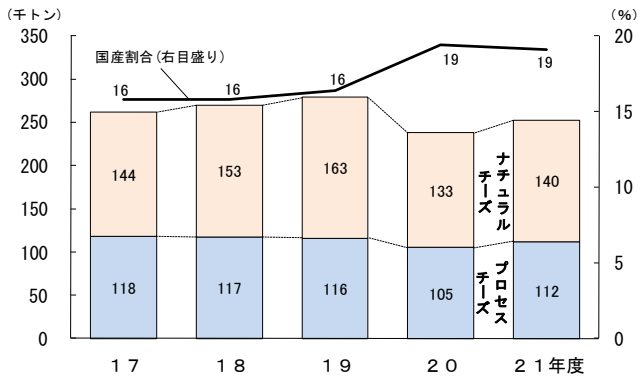
注：消費税を含む。

バターの大口需要者価格は、19年度は生産量の減少に加え、海外市場で需給ひっ迫による高値相場が続いたことから国産需要が強まり、966円/kg(2.2%)となった。20年度は1,135円/kg(17.5%)と前年度に引き続き高値傾向で推移したが、21年度は生産量、在庫量ともに増加したことを反映し、低下傾向で推移し1,118円/kg(▲1.5%)と3年ぶりに前年度割れに転じた(図11)。

◆チーズ

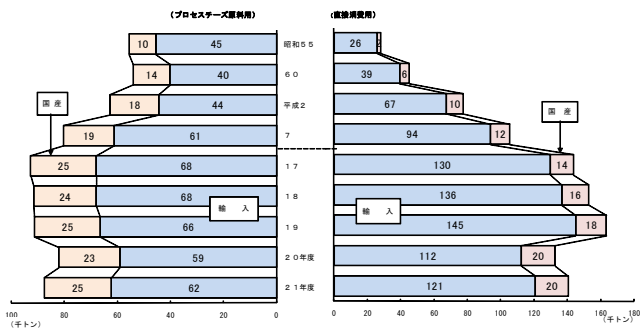
21年度の総消費量は増加に転じ、25万31千トン(6.2%)

図 12 チーズの総消費量と国産割合



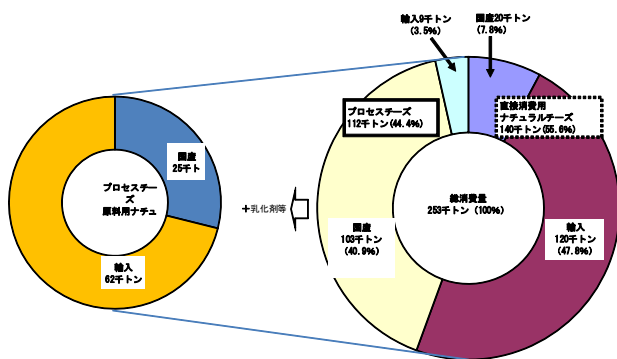
資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

図 13 ナチュラルチーズの生産量・輸入量



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

図 14 21年度のチーズ総消費量の内訳



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

注：直接消費用ナチュラルチーズとは、プロセスチーズ原料用以外のものを指し業務用その他原料用を含む。以下のグラフについても同様。

チーズの総消費量(ナチュラルチーズとプロセスチーズ)は、増加傾向で推移し、19年度は過去最高の27万9千ト

ン(3.4%)となったが、20年度は国際価格高騰などに伴い価格改定や容量変更が行われた上、世界的な経済不況により家庭用や外食用の消費が冷え込んだことによるものであり、23万8千トン(▲14.8%)と10年前の水準(10年度23万4千トン)まで落ち込むこととなった。21年度は、国際価格が下落し輸入量が増加したことや製品価格の値下げと内食化の進展もあり需要は回復し25万3千トン(6.2%)と2年ぶりの増加となったが、景気の低迷により依然として外食需要が低調であったため、過去最高であった19年度と比べると90%の水準にとどまった(図12)。

プロセスチーズの消費量は、18年度以降微減傾向3年連続で前年度を下回ったが、21年度は11万2千トン(6.6%)と増加に転じた。一方、直接消費用ナチュラルチーズ(プロセスチーズ原料用以外のものを指し、業務用その他原料用を含む)は、18年度以降2年連続で前年度を上回って推移していたが、20年度は、秋以降の世界的な景気失速に伴う不況で家庭用や外食用の消費の落ち込みが大きく影響し、13万3千トン(▲18.8%)と大幅な減少をなした。21年度は前年度から一転して増加に転じ、14万トン(6.0%)となったものの、この水準は15年度をやや下回る水準にとどまっている。

国産ナチュラルチーズの生産量は、堅調な需要の拡大を背景に17年度以降増加傾向で推移し、21年度は4万5千トン(4.50%)と、北海道のチーズ工場が生産能力を強化したこともあり、18年度から5年連続で前年度を上回った。このうちプロセスチーズ原料用は、おおむね2万トン前後で推移し、21年度は2万5千トン(10.5%)となった。

一方、直接消費用は、17年度以降着実に増加していたものの、21年度は19,729トン(▲2.4%)と減少に転じた(図13)。

ナチュラルチーズの輸入量は、おおむね 18～20 万トン台で推移しており、21 年度は国際価格の下落もあり 18 万 3 千トン(6.7%)と大きく減少した前年度から増加した。

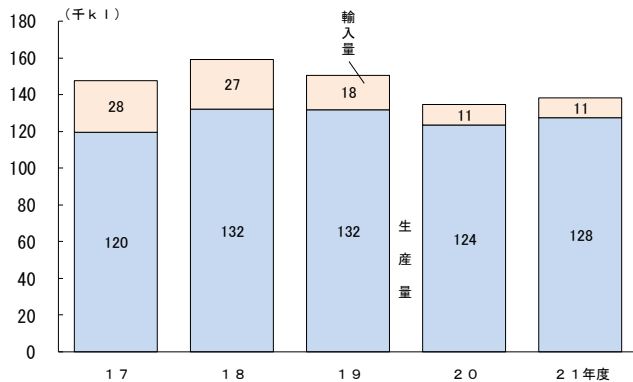
このうち直接消費量は 12 万 1 千トン(7.5%)、プロセスチーズ原料用は 62,237 トン(5.4%)といずれも前年度を上回って推移した(図 14)。

なお、21 年度のチーズ総消費量における国産の割合は 19.1%と前年度より 0.3 ポイント低下した一方、プロセスチーズ原料用に占める国産の割合は 28.9%と 1.0 ポイント上昇した。

◆アイスクリーム

21 年度の生産量はやや増加の 12 万 8 千 KL(3.3%)

図 15 アイスクリームの生産量と輸入量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、財務省「貿易統計」

注：輸入量は、1t=1.455klで換算。なお、平成 21 年度は概数値

アイスクリームは、近年、豊富な品揃えにより、女性を中心に購買頻度が高まっている。生産量は 19 年度は夏場は前年を上回って推移したものの、冬場は前年を割り込んだため 13 万 2 千キロリットル(▲0.1%)とほぼ前年並みにとどまり、20 年度は 12 万 4 千キロリットル(▲6.4%)とほぼ年間を通して前年割れで推移したが、21 年度は 12 万 8 千キロリットル(3.3%)と 3 年ぶりに前年を上回った。

輸入量は、17 年度以降減少傾向で推移しており、19 年度は輸入価格の上昇を背景に、前年度を大幅に下回る 12,713 トン(▲31.2%)、20 年度は 7,731 トン(▲39.2%)、21 年度は 7 千 3 百トン(▲5.7%)となった(図 15)。